

群 教 七	I 01 - 01
	平28.261集
	特別支援教育

# 友達と関わりながら、意欲的に学習活動に 取り組む児童の育成

— 学習に困難さを抱える児童に配慮したグループ活動の工夫 —

特別研修員 高地 朋見

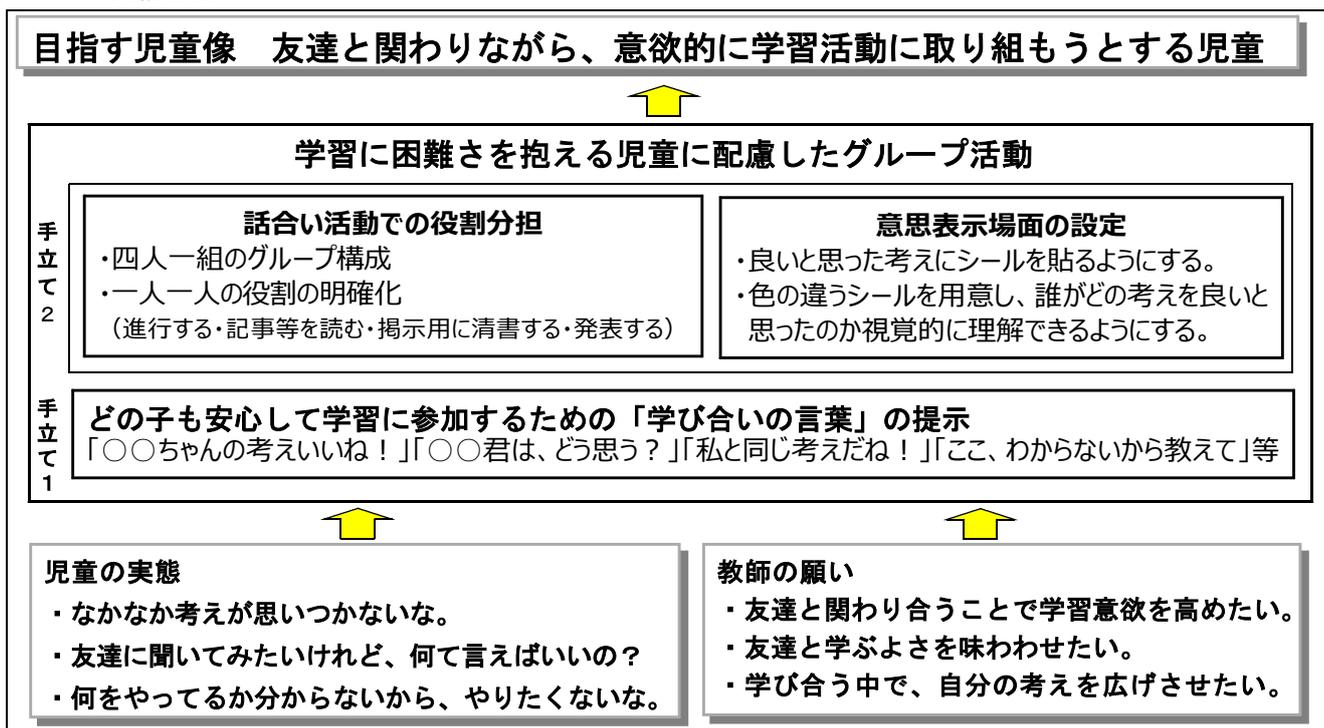
## I 研究テーマ設定の理由

本県では、小・中学校における特別支援教育の体制整備を進めてきている。『群馬県特別支援教育推進計画』の通常の学級における特別支援教育の推進では、「子どもが受け入れやすい手立てに配慮した授業づくり」を挙げている。その中で「障害のある子どもに対応できる有効な指導・支援は、どの子にも有効な指導・支援になる可能性がとても大きい」と述べられている。

本校においては、学習に困難さを抱える児童への支援として取り出し授業や支援員による個別支援を行っている。実際、学級の中で学習に困難さを抱える児童に支援員がついて支援を行うことは、学習のつまづきを補うという面では効果があると言えるが、周囲の目が気になり自分に自信が持てない様子や、学習意欲の低下なども見られる。そこで、学級全体の中で一人一人のよさを尊重し、安心して学び合える集団作りを目指していきたい。そのために、お互いのよさを認め合いながら発言したり、聞いたりすることができる子ども同士の関係作りが必要であると考え。本研究では、友達に分からないことを気軽に聞くことができるように「学び合いの言葉」を提示する。また、自分の考えを友達に認めてもらうことで達成感を感じながら学べるよう、「話し合い活動での役割分担」や「意思表示場面の設定」を取り入れていく。このように、言語環境やグループ活動を工夫することで、学習に困難さを抱える児童も意欲的に学習活動に取り組めるのではないかと考える。安心感のある中で友達と関わりながら、意欲的に学習活動に取り組むことは、学習に困難さを抱える児童だけでなく、学級全体の児童にとっても学習意欲の向上につながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

### (1) どの子ども安心して学習に参加するための「学び合いの言葉」の提示について

「これはどう考えるの」「ここ分からないから教えて」「〇〇ちゃんのこの考え方がいいね」「こうやるといいよ」などの「学び合いの言葉」を児童各自の机の上に貼っておき、いつでも使用できるようにしておく。これらの言葉を使用することで、学習に困難さを抱える児童は、友達に質問しながら学習に参加しやすくなる。また、ほかの児童にとっては、友達の考えを聞いて自分の考えと比較したり、広げたりしやすくなる。

### (2) どの子ども意欲的に学習活動に参加するための役割分担や意思表示場面の設定について

グループでの学習活動において、一人一人に役割を提示することで、何をやればよいかを明確にし、意欲的に参加することができるようにする。

また、グループ内で出た意見をまとめる場面において、様々な考えの中から自分の良いと思った考えにシールを貼るようにする。こうすることで、学習に困難さを抱える児童も自分の意思を表示することができるとともに、一人一人色の違うシールを貼ることで、誰がどのような考えに共感したのかを視覚的に理解できるようにする。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

#### (1) どの子ども安心して学習に参加するための「学び合いの言葉」の提示について

- 年間を通してクラス共通の「学び合いの言葉」を教室に掲示するとともに、児童一人一人が考えた「学び合いの言葉」も加えたものを机の上に貼った。学習に困難さを抱える児童は、友達に聞きたいことを質問できるようになった。ほかの児童も積極的に質問したり、友達の考えに共感したりすることができるようになってきた。
- 教師が実際に「学び合いの言葉」を使ってみせたことで、学習に困難さを抱える児童に「学び合いの言葉」を使おうという意識を持たせることができた。
- 本実践において、「〇〇君の考えはこういうことだよね」「〇〇ちゃんの考えはこういう理由だからいいね」など、児童は「学び合いの言葉」を自分たちで場面に合わせて使ったことで、話し合いを活発にすることができるようになってきた。

#### (2) どの子ども意欲的に学習活動に参加するための役割分担や意思表示場面の設定について

- 学習に困難さを抱える児童は、グループの意見を発表する役割を行った。その際、どのように発表すればよいか自分からグループの友達に意見を求めることができた。また、クラス全体に自分の発表を聞いてもらい拍手をもらったことで学習意欲が高まり、達成感を味わうことができた。
- 意思表示の場面では、シールを使用することで誰がどの考えを良いと思ったのか足跡を残すことができるようになった。学習に困難さを抱える児童も意欲的に選び、シールを貼ることで自分の意思を伝えることができた。ほかの児童は、徐々に自分の意思をシールで伝えるだけでなく、理由も添えてシールを貼る、さらには、同じ考えをグルーピングすることもできるようになり、お互いの意見を上手にまとめることができるようになってきた。

### 2 課題

- 「学び合いの言葉」の使用については、学習活動だけでなく、日々の学校生活全体を通して意識して使用させていくことが必要である。また、各單元ごとに使用させたい「学び合いの言葉」を教師が学習活動の初めに提示し、意識して児童が使えるようにするとともに、必要に応じて個々に言葉をかけていくことで「学び合いの言葉」の定着が図れると考える。
- 役割やシールがあることでどの子ども自分のやるべきことが明確になった。学習に困難さを抱える児童も話し合い活動での役割や、意思表示を意欲的に行うことができた。今後は、話し合い活動での役割や意思表示だけでなく、さらに意欲的に取り組める手立てを探る必要がある。

## 実践例

### 1 単元（題材）名 「新聞を作ろう」（第4学年・2学期）

#### 2 本単元（題材）について

本単元は、学習指導要領の「B 書くこと」の指導事項「イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」と、指導事項「ウ 書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げていくこと」を受けたものである。

「B 書くこと」の言語活動例「イ 疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりすること」を具体化した、「〇〇町のことを知ってもらえるような新聞を作ろう」という言語活動を位置付ける。

新聞を作成するに当たり、読み手を意識させ、どのように表現するとよいかを「子ども新聞」の見出しや記事を通して考えさせていく。次に、実際に見出しや記事を書く場面では、分かりやすく工夫することで伝えたいことを焦点化できるということに気付かせていく。これらにより、読み手を意識しながら記事の内容・表現の仕方を工夫し、新聞を作ることができる考える。新聞作りを通して、児童がグループごとに〇〇町の名産、名所そして学校について新聞記事にまとめ、自分たちが生活する〇〇町のよさについて気付くことができるようにする。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	新聞の特徴と作り方を知り、記事にすることを決めて、伝えたいことが明確になるように文章を書くことができる。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	新聞の特徴を知り、進んで新聞を作ろうとしている。
	書くこと	新聞の目的と特徴を理解し、書くために必要なことを調べている。 書く内容を整理し、記事ごとに見出しを付けている。 書いた文章を読み返し、必要に応じて修正している。
	言葉についての 知識・理解・技能	句読点を適切に打ったり、必要な個所で改行したり、文末を統一したりしているかなどを確かめている。
過程	時間	主な学習活動
課題 把握	第1・2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>「〇〇町のよさを知ってもらえる新聞を作ろう」という学習課題を設定し、学習計画を立てる。</li> <li>手本の新聞記事から新聞の特徴を見付ける。</li> </ul>
課題 追究	第3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>担当する記事についてグループで話し合っ決めて。</li> </ul>
	第4・5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>記事を書くための資料を集める。</li> </ul>
	第6・7時	<ul style="list-style-type: none"> <li>集めた資料を整理し、担当を決めて記事にする。</li> </ul>
	第8時	<ul style="list-style-type: none"> <li>記事に合う写真や図・グラフを決める。</li> </ul>
	第9時	<ul style="list-style-type: none"> <li>見出しのコツを考える。</li> </ul>
	第10・11時	<ul style="list-style-type: none"> <li>各記事の見出しを考える。</li> </ul>
まとめ	第12・13時	<ul style="list-style-type: none"> <li>記事を読み返し、必要に応じて修正する。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>完成させた新聞を読み合い、感想を伝える。学習の振り返りをする。</li> </ul>

### 3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全15時間計画の第10時「各記事の見出しを考える」に当たる。ここでは、グループの各担当が書いた記事の見出しをグループ全員で考える。グループでの話し合いの場面において、以下の手立てを用いる。

#### 手立て1

##### どの子ども安心して学習に参加するための「学び合いの言葉」の提示について

学習に困難さを抱える児童も友達と安心してグループでの話し合いに参加できるよう、「学び合いの言葉」を教師が提示し、これらの言葉を使って友達に分からないことなどを聞いたり、一緒に考えたりすることができるようにする。

#### 手立て2

##### どの子ども意欲的に学習活動に参加するための役割分担や意思表示場面の設定について

グループで記事の見出しを考える場面において、個々の役割を明確にすることで、どの児童も学習活動に参加できるようにする。また、個々に考えた見出しの中から、グループでより良い見出しへと一つに絞る場面において、良いと思った見出しに一人一人色の違うシールを貼ったり、選んだ理由を伝えたりして意思表示する場面を設ける。

### 4 授業の実際

#### (1) どの子ども安心して学習に参加するための「学び合いの言葉」の提示について

クラスには黒板の上に「学び合いの言葉」を掲示している(図1)。机の上には、一人一人が考えた「ぼく・私の学び合いの言葉」を貼った(図2)。児童は、常にそれらを確認しながら話し合いを行うことができた。本時においては、新たに「これは、同じ考えだね」「この見出しが分かりやすいね」「この意見を合わせたらどう」「ここは、この言葉で囲めるね」という四つの「学び合いの言葉」を提示した。これは、本単元の内容に合わせて使用させたい「学び合いの言葉」となっている。児童は、グループでの話し合いの場面において、この「学び合いの言葉」を使って話し合い活動を行った。なかなか友達の考えを自分から積極的に聞くことができないA児は、授業の感想に「今日は、『〇〇ちゃんはどう思う』という学び合いの言葉が使えた。明日はもっと、学び合いの言葉を使いたい」と書いていた。

話し合い活動において、「学び合いの言葉」をいくつも使うことは難しい様子が見られた。話し合い活動が始まれば、児童は見出しを考えることが第一優先となるため、「学び合いの言葉」を積極的に使おうという意識は低くなっていた。

翌日の授業では、どの児童も「学び合いの言葉」を使用して話し合いに参加できるよう、授業の導入で「学び合いの言葉」を使った場面演技を教師が行った。そうすることで、児童はどんな場面で「学び合いの言葉」を使えばよいかイメージが持てた。授業の中で「学び合いの言葉が使えた」と答えた児童は、昨日の19%から38%と増えた。「昨日よりも学び合いの言葉が使えてよかった」と感想を書いた児童もいた。

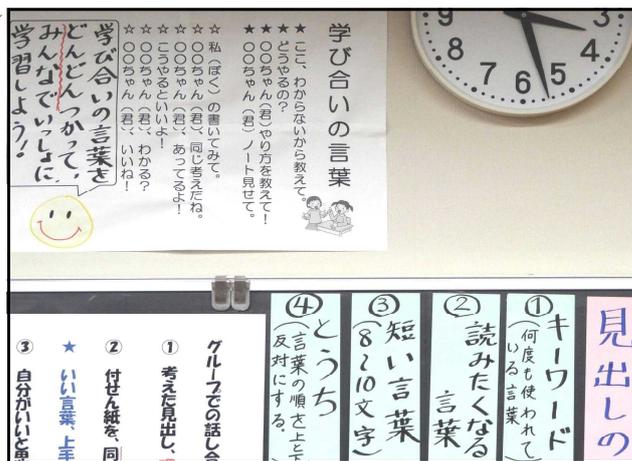


図1 黒板上にあるクラス全体の「学び合いの言葉」

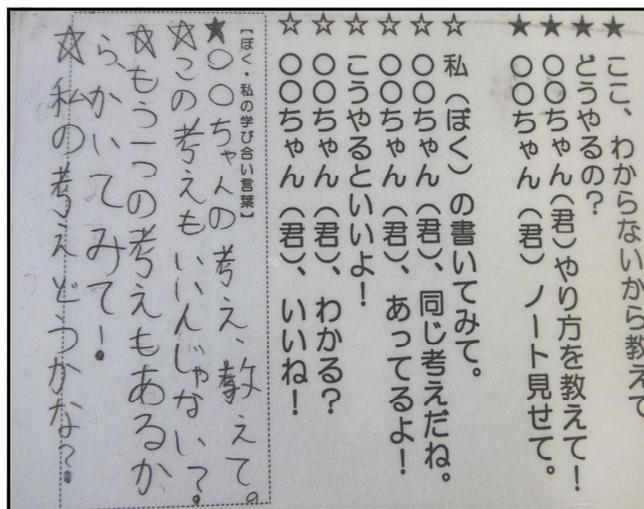


図2 個々に考えた「ぼく・私の学び合いの言葉」(左)

## (2) どの子どもも意欲的に学習活動に参加するための役割分担や意思表示場面の設定について

本時のグループで話し合う場面において、話し合いを進める、記事を読む、みんなで決めた見出しを黒板に貼る紙に清書する、グループで決めた見出しを発表するという四つの役割を一人一人が分担し、学習活動を行った。それぞれの役割については、教師が意図的に決め、どの児童も意欲的に学習活動に取り組むことをねらった。役割があることで、自分のやるべき活動が明確になり、一人一人が主体的に活動に取り組むことができた。

特に、学習に困難さを抱える児童は、グループで考えた見出しを発表するという役割を行った(図3)。児童は、発表するためにグループの友達に「どう言えばいい?」と、発表の仕方について自ら質問する場面も見られた。発表場面では、教えてもらったことを上手に発表し、友達から拍手をもらったことで、自分の言葉で発表できたという自信を表情から感じ取ることができた。

また、グループでより良い見出しへと一つに絞る場面において、良いと思った見出しにシールを貼ったり、選んだ理由を伝えたりした(図4)。意思表示する際には、学習に困難さを抱える児童も自分で良いと思った見出しにシールを貼っただけでなく、自分の考えてきた見出しに友達がシールを貼ってくれたことで、学習意欲がより高まった。ほかの児童は、シールを貼る際、最初は「この見出しがいいと思います」だけであったが、二つ目以降の見出しを決める場面では、「〇〇ちゃんのこの見出しがいいと思います。理由は△△だからです」と、理由を話してからシールを貼った児童がいた。また、「私も〇〇君と同じで、〇〇ちゃんの見出しは△△だからいいと思います」と、友達の意見を上手につなぐ話し合いもできるようになった児童もいた。さらに、それぞれの見出しのキーワードとなる言葉を記し、より良い見出しを考えようとするグループも増えた。



図3 グループで考えた見出しを発表



図4 シールで意思表示をした話し合いシート

## 5 考察

どの子どもも安心して学習に参加するための「学び合いの言葉」については、「友達の考えを聞くときに学び合いの言葉を使って、みんなと見出しを考えることができた」「もっと学び合いの言葉を使って話し合いたい」と書いた児童がいたことから、「学び合いの言葉」を使用することで、話し合い活動がスムーズに進み、友達の考えを聞くことができたのではないかと考える。また、学習に困難さを抱える児童に対しては、教師が「学び合いの言葉」の使い方を示すことで、「学び合いの言葉」を使おうという意識を持たせることにつながった。個々の実態に合わせた支援や安心して学べる言語環境を整える必要があると感じた。

どの子どもも意欲的に学習活動に参加するための役割分担やシールについては、全員が学習に参加できる環境を整える点では有効だったと考える。特にシールの使用は、意思表示の足跡が残るという意味で視覚的効果があり、学習に困難さを抱える児童もシールを貼るということで意欲的に活動に取り組めた。また、ほかの児童も積極的に自分の考えを発表することへとつながった。役割分担については、21人中20人の児童(95%)が役割分担があるとグループでの話し合いがしやすいと答えた。理由としては、自分が何をやればよいか明確になり学習活動がしやすいということが挙げられた。学習に困難さを抱える児童は、「役割を果たせたという達成感や満足感がある」、「みんなで協力してできる」と回答している。実際に、他教科のグループでの話し合い活動においても教師が提示しなくとも、話し合いを進める、グループの考えを紙に書いてまとめる、発表するという役割を自分たちで分担して行う場面が多く見られるようになってきたことから有効な手立てだったと考える。学習に困難さを抱える児童は、発表という自分の役割やシールを貼って意思表示する場面があったので、意欲的に学習活動に参加することができた。今後は、話し合い活動での役割や意思表示だけでなく、さらに意欲的に取り組める手立てを探る必要があると感じた。